宗像

毎月一日発行
定価一年 送料共500円
発行所
宗像大社社務本局
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊26番

七夕揮毫会行わる

―中津宮に於て―

このたなばた揮毫会は、今より八年前昭和三十一年より始められたもので、中津宮境内にある末社牽宮・織女社の社伝に因み、七月中旬以降の日曜日に、郡内小中学生が、当日浄書して献書する行事である。

玄界灘に暑い日射しが照り返す七月二十二日、大島の中津宮に於て恒例の第八回たなばた揮毫会が開催せられた。この日集まった良い子達は凡そ七百名余り、この良い子達に父兄がそれぞれ付添って大島中津宮に参集した為、中津宮参道境内は人で立錐の余地もない程に埋まってしまった。

これより先、七月十二日、中津宮より依嘱を受けた「たなばた揮毫会」では、郡内の小中学生徒より本会に参加する生徒から作品の提出を求め、その予選を行った。予選に集った作品は千二百余点、何れも日頃の腕前を発揮したものとあって、審査に当った先生方も汗だくであった。この内七百余名が予選を通過、愈々大島に渡り、大島中学校に於て決選を迎える事となったのである。

当日は、決選とあって良い子達よりも父兄の方がドキドキと胸をときめかせて、試験会場にあてられた教室の吾が子の一筆一点に一喜一憂する姿が見られた。

又筆を振う良い子達は墨をあちこちに飛ばして、用紙よりも顔に髭をはやしたり、頬黒?を付けたりして一生懸命であった。

作品課題は、例年通り、一年「七夕」、二年「ほし」、三年「ほしの光」、四年「美しい星」、五年「星の神話」、六年「夜空月光」、中学一年「谷川清流」、中学二年「高山白雲」、中学三年「天地清明和風」であった。

正午までに、当日苦心の作品が中津宮に奉献され、午後一時、審査会が開かれた。

審査にあたられた先生方は、福岡女子高校坂口雅風氏、筑紫女子学園古賀計水氏、三筑中学校城戸筑山氏の三氏があたられた。

午後二時より別掲二面の通り、審査の結果が発表せられた。

夏の日射しが山の端に傾むく頃、成績発表を待ち受けた生徒、父兄参列のもとに献書祭が執り行なわれた。

団体成績は、小学校の部一位吉武小学校、二位大島小学校、三位赤間小学校。中学校の部一位大島中学校、二位津屋崎中学校、三位中央中学校であった。

祭典終了後、社前に於て小野権宮司の挨拶があり、書は人柄のあらわれであること、心身共に健康な者が困難な練習を重ねて人格完成と相まって達せられるものであること、さらに中津宮様に捧げる為にこの揮毫会に参加された皆さんはきっと立派な社会人に成長するであろうこと等、激励を兼ねた謝辞が述べられた。

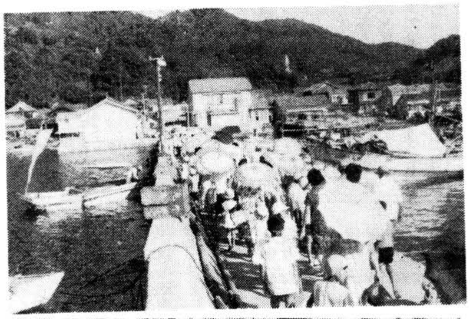
審査の先生からは本年は昨年よりも成績がふるわない、昨年のように両者いずれを選ぶべきかと迷う場面が少なかった。来年は一層努力せられたい、又来るべき第十回は大々的になるであろうから、しっかり練習して欲しい旨講評と激励の言葉があった。

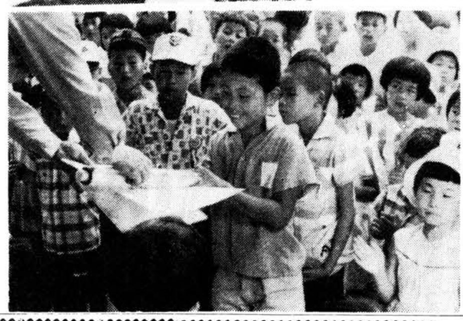
沢山のよい子たちは夫々の授賞品をかかえて父兄ともども喜々として社前を退下した。

終りに此の日の行事に対し、例年のことながら一方ならぬお世話をいただいた関係各位に対して厚く御礼を申し上げたい。

（入選者氏名二面掲載）

入選作品（小五）


大島桟橋を行く参加者の群


賞状を貰うよい子（中津宮）

宗像大社御用達
神輿 祭具 装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

論説

郷土の誇り救癩の父

世人一般が嫌がる仕事を進んで引受け、しかもこれに貴重な生涯を賭けるなどは言うべくして凡庸の行い得ることではない。自己を犠牲にし名利を超越して、救癩の慈悲心一筋を貫いて五十八年、聖者に劣らぬ仏道を行じた偉僧の横顔を描いて吾人反省の資としたい。あまり世上に知られていない吾宗像が生んだ郷土の誇りとすべき人でありながら、宗像人で知る者は少いが、まさに孔大寺山下池野を出生地とする綱脇龍妙師がこの人である。

先ず老師が救癩に志を固めるに至る迄の経緯と、八十八歳の今日まで一家を挙げて苦斗の精進を続けた偉大な足跡を偲んで、その功績に心からの敬意を献げたい。信仰の世界に身を置く者は私財も無用だし、名誉は語るに足らず、黙然信ずる道に一生を歩む崇高な悟道の精神に感動しつゝ筆を進めてゆきたいのである。

老師は宗像の極めて辺鄙の地に生立ち、熱心な日蓮宗信者の父君より早くから信仰上の感化を受け、少年の頃一度飯塚の商家に奉公に出たが、その宗教家的素質は算盤の明け暮れに満足しなかった十八歳仏門に入る。この少年仏徒の飯塚市の法性寺に於ける学問修行に対する真摯なる態度は、実に異例なものがあった。然も少年仏徒の精神的成長は社会観宗教観に多くの苦悩を持つに至ったのである。そこに人生の転機がある。

仏弟子でなくても青年期の精神的成長は、大いなる希望に燃えると共に、反面また多くの苦悩を人生観の中に拾いあげるものである。現代を生きる青年にはそれをスピードに忘れ、或はスリルに、なげやりな刹那主義の生活に指向して、貴重な人生を無反省に過し生命をさえ軽視する傾向がある。

これは終戦後の一時的過渡期現象として楽観し、やがて多くは真剣な思索と堅実な生活態度によって青年期の苦悩を解決するものだと見る向もある。

この青年仏徒は思想上の転機に起って、平和社会の建設を念願とするに至った。その大目標の発見に自ら感動して或る日身延山に参詣した。彼は身延の河原に意外なものを見た。それは人生に希望を失い社会から冷たく見離された一群のライ患者である。同情の目は向けたが、徒手空拳の青年僧はそのまゝ去る外なかった。然し彼の足を捉えたものがある。日蓮だっ常不軽品を読誦しつゝ去らんとする彼を動かさなかった日蓮は遂に救癩事業に生涯を献げる偉大な悲願を植えつけたのである。時は明治三十九年七月。この頃まで癩予防法はなく、僅にキリスト教の外人が二カ所の施設を開いているに過ぎなかった。

一介の貧僧は宗祖の教示に異様の感動と不屈の決意に奮起したが、進路はまさにいばらの道、筆舌に尽し難い櫛風沐雨の苦闘は始まったのである。明治四十年に癩予防法が制定されて幾らかの援助は得られたが、施設深敬園の経営は安易であろう筈がない。東京に出て専門家に治療の術を学んで、自ら患者にこれを施し、奥さんまた人の嫌がる患者の身辺を世話して幾星霜。現在の深敬園は八十一人の収容者を見る施設に発展してきたが、病を救うと共に光明を与える努力は今なお孜々として続けられている。五十八年の長きに亘って肉体と精神とを救う一途の聖なる念願は、多数の患者に慈父として慕われ、関係者の尊敬の的となっている。

その間度々その功績が顕彰されたが、恐らく老師はそれに深い関心はなく、栄誉より患者の心の糧を与えることにより大きな喜びの日々を送っているであろう。

吾人は郷土人すらあまりその名を知らぬことを不思議とは思わない。一介の青年僧の蹶起を促した仏道はむしろ名利をとゞめない精進にその悲願があると思考する。

頃日郷土の先輩安永渡平氏等が中心となって、老師の米寿を祝したいという動きのあることを聞いたそれは単なる長生の祝ではなかろう。言うべくして行い難い偉大なる労苦に対する同郷人の感謝の集いと思われる。

宗像の片田舎が生んだ救癩の父綱脇龍妙師は、今こゝに改めて男性宗像の輝やかしき舞台に登場した。こんな表現は老師の極めて喜ばぬところだろうが、郷土の誇として後進に何らかの示唆を与えていたゞいたことを感謝し、その健勝を祈ってやまない。

×　×

暑中お見舞申し上げます

宗像大社宮司　久保輝雄
職員一同

社報「宗像」編輯部
昭和38年盛夏

阿蒙少言

議会運営の正常化などという言葉が平気で使われているが、正常であるのが当然の立法の府が極めて正常でないことは国民周知の事実、考えようによるとこれほど国民を馬鹿にした選良を度々尨大な国費を使って選び出したのだと今更ながら寒心してみる。政治は絶対に浄化せず、公明選挙は悲しくも永遠の空念仏 ○そろそろボーナスが姿を変えてお目見得をはじめる。亭主が同僚と飲み歩いたのは昔の話。賢婦人その全権を掌握して度々デパート行脚。亭主のネクタイが買物の附録に終る情況は無理な想像なりや ○「美しいお嬢さんですなー」「イイエー」とは母親の謙遜。「おとなしい娘さんですなー」これを否と言う母親は滅多にない。後者は無難でよい。小町娘にも千人なみのお多福嬢にも通じる、とは仲人百回の記録を持つ或る高砂老人の茶話 ○学生々活の最大の収穫は良き友を得るにありと教えられた記憶がある。小学校から大学まで幾百の学友の中、数十年変らぬ友情を持ち続ける人は幸福である。飾らぬ自由な学生時代なればこそ、心の伴侶が得られる。一人の良き友は生涯の貴重な心の糧だ ○会社を訪れる。受付子の応待ぶりにも種々相がある。これでその会社の社風と従業員の待遇がほゞ知れる ○ダンサーと結婚したいと父母に告げた。粒々辛苦して堅実に事業を築き上げた親は激怒した。月日流れて勘当同様の息子夫婦と共に暮らすようになって数年。両親は息子よりも嫁が気に入って姑と嫁はまことに円満。こうなるとダンサー生活は立派な花嫁修業であったと言えよう ○冷房、足が冷える、暖房頭がのぼせる、文明の利器は人の病気を増し、生命の危険を大にする。茅屋の涼風一掬、持たぬ者の幸。

（白雲）

第二十八回 宗像大社献詠歌会詠草

七月七日　於社務所詠草到着順

田島　杉本紘一
献詠の歌集作らむと云ひし時我れ先に競ふ歌の載せ場を

神湊　隣船　俊
しとくと心打つなり春雨に謹しみて草す献詠の歌

大濠　広田美津子
我が庭の小草もえいでぬ降りそゝぐ五月の雨の今日も昨日も

宮田　片山　一
世すぎとて心に染まぬ行商の魚嗅ひがいつか身にしむ

戸畑　田中ハツセ
長々とうす墨色の貨物車を赤き機関車引きて行きたり

名残　竹原　圓
老いらくの湯治の客は疲れゐてその灸あとの眼にしみるかも（俵山にて）

村山田　吉田佐市郎
ま近なる許斐の嶺も霧こめて雄々しき姿見えぬ梅雨空

津屋崎　麦野　時雄
さし木して三年目なりこの夏は匂ふ卯の花軒端にぞ見る

大濠　江崎　琴子
家も庭も復興なりて安らげどおもひ新たなり空襲の今日（六月十九日）

沖島　前田裔之助
今日も亦雨かと怨み仰ぎ見てむぎの腐れに悩む百姓

吉武　高山徳七郎
山の幸初のめぐみの山桃の香りゆかしも里の家に来て

東郷　藤崎　辰子
ねずみもちやさしき雨にほろくと蝶もふれぬにこぼるゝものを

内浦　長畑　房江
鮮やかに南瓜の花の黄色見ゆ靄にけむらふけさの裏畑

田島　斎藤　惇
ふるさとの鶴鳴橋に立ち居れば流れに浮ぶありし日の影

戸畑　伊規須ゆき
往きは右に帰りは左ふるさとの城山は吾を迎へ見送る

田島　吉武　俊次
四塚を写してうねる海面に日射しまばゆし夕焼の空

江口　辻野　開造
あしたには生を祈りつ夕べにはその日の幸を感謝する我

吉田　占部　由久
刈りしまゝ麦も菜種も青き芽さすと長雨の空仰ぎてかこつ

門司　永島　哲夫
汝がために蒐め集めしさぼてんの今はむなしも花もたんとす

田島　力丸　登
植ゑおへし青田ながめつ畦に立ちおほみたからのさかえ祈らむ

勝浦　永島　計七
老人をいたはる心もの腰に示して席をゆづる女学生

宮田　北原きみ子
きり晴れし朝のひとゝき純白のしょうぶの花が眼に泌みてみゆ

田熊　小野角次郎
東の空に飛行機影のして早苗の田の面爆音響く

〃　小野かを流
博多湾見はるかしたる日蓮のおゝしく立てる姿見上げつ

南郷　中村　幸
我が眉を見つむるらしき理容師のきびしさを見つ眼をあけしとき

戸畑　花田　道子
ゆっくりと速度おとせし自動車より夜景たのしむ若戸大橋

岡垣　早川藤九郎
高倉の乳垂の川のみなもとはちたるの池の苔にわく水

東郷　安部　重郎
ひと年のめぐりは早し玉の苗植うる広田に歌声流る

〃　安部　静子
重たげに雨に濡れゐる紫陽花の窓越しに見ゆみづくしくも

吉武　立石　昇
旅に来し小浜の宿にはからずも遠く勤むる吾子と語らふ

〃　立石ろせの
今日も亦更めて降る初夏の雨にあじさいの花重く地につく

吉留　山下シヅエ
合羽着て牛追ひゆかん苗代を又もてあます雨降りしきる

戸畑　山磨　昌子
満員の乗客整理てきぱきとユーモアも入る車掌の明るさ

宮田　片山　朔子
襖深く占むる影あり幾日か怖れをもちて夜の窓に寄る

福岡　林　まつえ
河骨の葉は裏返り水かさのませる流れにゆれつゞけ居り

東京　永島　潤
高原の温泉の煙裾伸びて見返る空に富士は暮れゆく

極度に緊張した上ずった声が響いていた。

「死して護国の鬼となり……国民の皆さんの負託に答える為……決して自分は生還を期してはおりません、死して護国の鬼となり……国民の皆さんの……」

あとは見送りの人達のざわめきで聞こえなくなってしまった。

時は大東亜戦争末期の頃、所は宗像郡K町の四辻である。応召兵Eさんは肩から斜に襷を掛けて壇上に立っていた。部厚い近眼の眼鏡の奥でEさんの目にキラリと光るものがあった。

一億総玉砕の気分が誰の心にもあった時代である。応召兵は時の英雄であった「死して護国」の文句も当時はちっとも不自然ではなかった。今から考えれば、何とも空虚な感じがするかも知れないが、あの当時としては本当の実感であった。兵隊は誰一人として絶対に生還できるものとは考えていなかった。人は誰でも、極度の興奮状態を持ったことをあとで考えてみると、それがおかしくもあり、又懐しくもあるものである。

それはさておき、歓呼の声に送られてEさんは「今ぞ征で立つ父母の国」の軍歌をあとにした。

一週間経った、終戦。Eさんは兵隊毛布を背負って帰郷した。あの感激の入営の日から僅か一週間後にである。

「あんた〝死して護国の鬼〟はどうしたね」

会う人毎に冷やかされた。Eさんにとっては、そう云われるほど辛いことはない。しかし任務がない。死に所はもう存在していないのである。Eさんが考えた。

「うわあ、かんべんして下さい」

ただただ頭を掻くだけであった。Eさんは郡教育界の有力者を「生きて護国の鬼」となって守り抜く以外に方法はないのだ、とその眼を輝やかせながら、訥々とはこれが根拠である。

「死して護国の鬼となるが無効になった以上、ようし、わしは生きて護国の鬼となろう」

Eさんが決心したのは正しかった。戦後の教育界は可成り難しくなった。

しかしEさんの地区では、学校での式典には必ず日の丸を掲げ、全校生徒に国歌をうたわせた。正しい日本を蘇らせる為には、何が何でも「日章旗」と「君が代」以外にはないのだ、これを「生きて護国の鬼」となって守り抜く以外に方法はないのだ、とこれが根拠である。

いうEさんの決心は固かった。組合と話し合う時でも、そのほかさまざまな社会事象に対決する時でも、それに変りはなかった。

「生きて護国の――」をEさんが人に洩らしたことはない。しかし、終戦直前に召集された時の感激をEさんは戦後の在り方に転換した。そしてついに、Eさんの方策は成功し、従ってEさんの信念もますます確固たるものになっていった。

世の中が変転して十八年過ぎたが、今は頭も薄くなったEさんが、相も変らず強度近眼鏡の奥にその眼を輝やかせながら、訥々とこれが根拠である。

あの感激の入営の日から僅か一週間後にである。

「あんた〝死して護国の鬼〟はどうしたね」

会う人毎に冷やかされた。Eさんにとっては、そう云われるほど辛いことはない。しかし任務がない。死に所はもう存在していないのである。Eさんが考えた。

「うわあ、かんべんして下さい」

ただただ頭を掻くだけであった。Eさんは郡教育界の有力者を「生きて護国の鬼」となって守り抜く以外に方法はないのだ、とその眼を輝やかせながら、訥々とこれが根拠である。

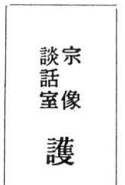
いうEさんの決心は固かった。組合と話し合う時でも、そのほかさまざまな社会事象に対決する時でも、それに変りはなかった。

「生きて護国の――」をEさんが人に洩らしたことはない。しかし、終戦直前に召集された時の感激をEさんは戦後の在り方に転換した。そしてついに、Eさんの方策は成功し、従ってEさんの信念もますます確固たるものになっていった。

世の中が変転して十八年過ぎたが、今は頭も薄くなったEさんが、相も変らず強度近眼鏡の奥に

「護国の鬼」が照れた。

宗像談話室　護国の鬼

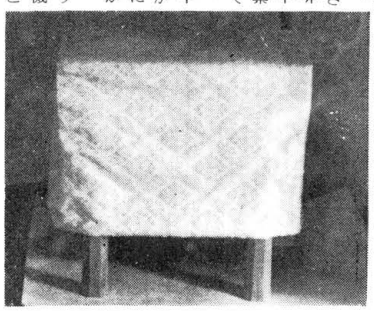


神威赫々たり
――各地より御分霊の照会陸続と来る――

当社の御神威が、古代海北辺に対する重要性と鎮護国家の立場から多くの崇敬を集めた事は衆知の事実である。現在全国各地に二千余社の分社がある事からも宗像三社の信仰が大いに流布せられた事は想像するに難くない。現在、当社は交通安全の守護神、水の神、酒造神として、又繊機の神、ほか文化産業の祖神として各方面から信仰されているが、最近は各地から御分霊を受けて御分社を建立したいとの照会が陸続と舞い込み、祭儀関係者をあわてさせている。

戦後分霊したのは、出光興産の製油所等の他、近県数ケ所であったが照会に接しているのは、関西及び関東の諸神社で、関係者の話合いが纏まれば、来月中にも遷行される筈である。朱般の出光興産、千葉製油所の奉遷祭に続くものとして注目されている。

戦後、ここに十八年、人々の心が平静になると共に必然的に「神」が求められて来た。民族の歴史を振り返ろうとする時機が到来したものといえるであろう。



祇園祭斎行

七月十五日、月次祭に引き続いて境内末社須賀神社の例祭が斎行われた。

夏の盛りにあたり、これから実りを迎える農作物に風雨鳥虫害のない様に祈りが捧げられた。

この末社の祇園祭がいつ頃から始められたかは詳らかではないが恐らく祭神が素戔嗚尊である事から牛頭天王の疫神鎮和の信仰と結びついて始められたのであろうと云われている。

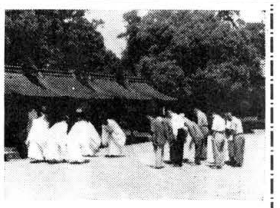
旧六月十四日、十五日に京都八坂神社で御霊会が行われる事は著名の事であり、この時に、蘇民将来の守札を門前に祭る等、様々な民俗行事が行われている。

八月祭事表

一日　**二日**　**夏季大祭**

毎日午前十時

前日の「夏越祭」にひきつづいて



行われる夏の祭。一年の中の節にあたって国家隆昌、産業繁栄、交通安全、文化興隆、五穀豊穣、大漁満足の大祈願祭が行われ、このほか特に交通安全大祈願祭を行う

一五日　月次祭　午前十時

八月の交通訓
あつい時ほど冷静になれ

名士会入選者氏名七夕揮毫

宗像談話室　護国の鬼

降る雪（三）

宗像四郎氏貞（六）

山下半可　作

福田長庵　画

戦時の兵力は十五百騎であったと伝えられる。戦斗の時は宗像党は常に先陣を承るのを例としていた。これが又、とてつもなく強力な「宗像の軍神」と恐れられていた。宗像大宮司の楠の葉の紋所のついた旗印を見ると、何処の戦場でも敵が逃げ散るという有様であった。隣隣隣がこの宗像党を己れに有利に引きつけようと考えたのは当然であった。宗像氏男が大内義隆の従弟であることに問題は無いが、氏男にはどうしても訳が後嗣が出来ない。先年この事に気付いて隣隣が氏男に妻子を仲介したのも深い思慮から出たことであった。

氏男の父の兄正氏に子がなかった。この母親は隣隣の姪聞輩である。照葉の生んだ鍋寿丸は、従って隣隣の血縁になる訳である。鍋寿丸が氏男の後を継いだならば、同じく縁類の豊後の大友と、筑前の宗像との関係に対する懸念は無くなる筈である。

ここ迄考えて来て隣隣は己れの口許の弛かかるのに気付いた。隣隣が考えていたのは極く僅かな時間であった。隣隣も隣隣が他の事を考えていたとは思い及ばない。武任をいかにして君側から離すかの思案をしているものと思っていた。

「されば」

隣隣が徐ろに口を開いた。さも考えあぐねたかのようである。

「されば、杉殿のいわるる通り、近く折りを見計らうて、殿に今一度申し上ぐる事に致そう。無論、武任めの事についてじゃ、どうであろうか、隣隣どの」

行き着く所迄考え抜いた態にして、隣隣異論はござらぬ。

「然るべく、よろしう頼み入る」

生真面目な顔をして隣隣が答えると、隣隣が鷹揚に頷いた。

「それでは御両所、今日の事は他言無用にせられたい」

とりつくろって二人に申し渡すと隣隣が外に目をやった。隣隣と杉が目を見合わせた。それから二人共隣隣が見ている方を見やった。

「おう、雪じゃ。雪も降る時には降るものじゃ。いつまでも降らいでは済むまいでのう」

隣隣がつぶやくように云った。又も二人が目を見合わせた。聞きようによってはどうにでもとれる言葉である。まだ三十才そこそこの隣隣が此の時程大きく見えたことは無かった。

「おう、何やら寒うござって」

この時の二人はすでに完全な追従者になっていた。冬の日が傾いた隣隣邸が何処まで、この問題について考えているのか、つまり武任を除いたあとの家中の束ねをどうして行くつもりなのか、又隣隣自身の野望があるのか、無いのか、そして更に、自分が真先に謀叛について暗示めいた事を云い出しておき乍ら、自分自身の心はどうなのか、一切が不明であった。表面上の話については、何の疑念もない。君側の奸を除くという点については家中正義派の殆んどが異論のあろう筈がないからであろう迄はっきりした形をとることはなろうとは考えていなかった。まだ隣隣邸が何処にでもいるものと思わなくてはならない。

隣隣の屋敷に謀叛の正月の謀議は疾うに相良武任に知れていた。

「それでは御両所、今日の事は他言無用にせられたい」

と語った隣隣の言葉が武任の耳に入っていた。武任程の智謀者がこれを聞いて手を拱いている筈がなかった。人は誰しも自分の立場が悪くなると、弁解しがちなものである。真の勇者ならば弁解はしないかもしれない。然し己れに暗い処があれば弁解を試みるのが普通である。そして自分を正当化する為に他を傷つける事が往々にしてある。他の迷惑を顧みる余裕がない所為であろう。それが結果として自分自身に巡って来ることも知らずに――。

武任の場合がそれであった。彼は彼の考えなりに出来るだけ早く手を打った。すぐさま筆頭家老の杉重矩に往進した。

話は飛躍していて、最早陶一派が謀叛を起すかのような印象を与えた。今度は重矩が慌てた。が、流石に老巧の重矩は考えた。先手を打とうと考えつく迄には大した時間を要しなかった。あわよくば我が手で大内家を――、或いは絶好の機会ではあるまいか。こんな考えが杉の頭のどこかにあったかもしれない。陶に事を起させて置いて、「漁夫の利」を収めようという風に考えたのかもしれなかった。「人の褌で角力をとる」ことは、世上古い行為の代名詞とされている。しかし実際にその場面に遭遇すると、大抵の者はその誘惑に勝てない。（つづく）

× × ×

八幡宗像会夏季総会

—新会長 山路虎夫氏にきまる—

六月二十三日、午前十時、八幡宗像会々員五十余名が宗像大社に参拝した。

毎年の事ながら、会員一同益々元気で、普段は忙しい人達ものこの日だけは仕事をさしおいて出席されるのです、とは幹事さんの弁であった。一同参拝の後、津屋崎にある人気亭で宗像会夏季総会を開催。

先ず開会の辞に引き続いて、安永会長が健康上の理由等により、会長の職を辞任したき旨を述べられた。就中、三十年間、八幡宗像会の会長として会員諸氏の御鞭撻に依って重責を果す事が出来た事は大きな喜びであった、と過ぎ去りし数々の想い出を回想されながら淡々と語るお話には、今迄の八幡宗像会の歴史をしのばせるものがあった。会員一同安永会長の辞任を了承。

続いて新任会長推薦が行なわれ、副会長の山路虎夫氏が推されて就任する事に決定した。

その後、現北九州市長、吉田法晴氏、他数名の新会員が紹介された。

終りに当社久保宮司が挨拶を述べ、わけても現在進行中の宗像郡重要文化財共同収蔵庫（宝物館）建設について説明を行ない、宜しく御後援下さるようお願いした。

八幡宗像会は先にも述べたように三十数年の歴史を持っている。そしてこの会が何等の利益団体でもないのにかかわらず、強力な親睦活動を続けている事は驚嘆に値する。春秋二回の定期総会をはじめ、夏季の総会に於ても、出来るだけ大社に参拝してから会を持つ事にしており、それが又同郷人としての郷愁を充たすよすがともなっている。八幡宗像会が今後新会長、山路虎夫氏を中心としてますます発展して行くことを望みたい。

（写真は挨拶をする久保宮司）

宝物館建設工事愈々初まる

—清水建設が施工—

本紙六月号で宗像大社宝物館建設工事の計画を紹介したが、愈々今月二十九日に起工式を行う運びになった。三十九年度に国費が支出される事に決定し、工事は清水建設がこれに当る。

工事工程は十一月迄に鉄筋コンクリート工事を終り、十二月に屋根工事並に建具工事を行い、二月迄に木工事、左官工事を完了し、三月迄に雑工事を終了して、来年三月末には完工の予定である。

しかし宝物を収蔵するには、建物の乾燥期間を必要とするので、実際に展観、開館するのは来年の秋になる予定で、来秋は名実共に西日本随一の宝物館が開館するわけである。

主なる宝物収蔵品は次の通り

○沖ノ島出土神宝 一萬一千余点（国宝並に重要文化財）

○興楽寺所有伝定法師一筆一切経（重要文化財）

四千三百三十一巻（重要文化財）

○宗像文書八巻、当大社所有（重要文化財）

○木造狛犬一対、当大社所有（重要文化財）

○石造狛犬一対、当大社所有（重要文化財）

○阿弥陀経石一基、当大社所有（重要文化財）

○蕨手威肩円胴丸甲、当大社所有（重要文化財）

○稽古区所有滑石製経筒（重要文化財）

○宗像郡郷土館収蔵文化財

○其他郡内散在の文化財

以上

三十八年度評議員会開催

七月十五日、社務所に於て昭和三十八年度氏子会評議員会が開かれた。この日猛暑の中を集合された人々は庄村会長以下二十六人、次祭参列後、午前十時より開かれた。会は先ず庄村会長の挨拶に始まり、宇都宮祢宜より夏季大祭の人形、献米等の依頼、次に久保宮司が神社の現況を報告し特に宝物館建設について氏子の方々に協力方を要望した。

閉会後昼食を共にし歓談数刻、共に大社の祢栄を寿き、惜しみなき協力を語りあった。

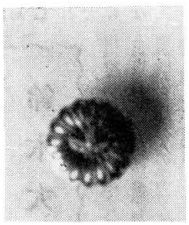
毎年のことながら、担当者はこの暑さの中を車を駆って郡内の人形と献米を集める。これについて七月三十一日の夏越祓祭に間に合せるために、郡内の評議員の方々の御尽力は筆舌につくしがたいものがある。

この信仰の篤い神郡の中核勢力となっている人々に感謝の誠を捧げたい。

追記、三苦権祢宜の大神神社転任に伴い丸谷権祢宜が氏子会係担当となりましたので宜敷くお願いします。

来る出ジッバ大社バッジ宗像

かねて当社バッジを制定して欲しいとの声が氏子会評議員の間にあったが、さき頃写真の様に、菊の花弁の中に楠の葉を浮かせたバッジが制定された。直径二糎、厚さ三ミリで堂々たるものである。当社では評議員の希望者に実費で配布する予定である。



社務日誌抄

六月二〇日　福岡市教育委員石橋忠次氏来社。

二一日　宗像郷土館より収蔵図書を移管され、宝物館が建設されてから一括収蔵される予定。

二二日　八幡宗像会五〇名参拝

二八日　香椎税務署へ久保宮司講演の為出向。

三〇日　清酒「万代」醸造元社長小林作五郎氏外二名来社。午後五時より大祓式執行。

七月一日　午前十時、月次祭斎行、文部省保坂技官、五島美術館宮崎和雄氏他一名来社。

二日　楠本権祢宜赤間地鎮祭奉仕の為出向。西宮神社名誉宮司吉井良尚氏、祢宜吉井貞俊氏、全良隆氏来社。神社本庁調査部長岡田米夫氏来社。

五日　国鉄戸畑駅二十名参拝

八日　玄海町商工会、境内末社蛭子神社に賽銭箱を奉納。

九日　神湊海開祭、小野権宮司升谷出仕奉仕。

一〇日　八幡製鉄海の家竣工式並海開き

一五日　午前十時月次祭斎行、後郡内氏子会評議員会。

一六日　福岡県観光連盟粟城運次氏参拝、昭和バスガイド団体参拝。

一九日　西日本新聞遥拝記者来社。

二〇日　福岡相互銀行支店長加茂川与三氏来社。

町村往来

◇福間海水浴場で水神祭…1日午前11時から井原観光協会長（町長）広渡商工会長、同町議会議長ら関係者多数出席して開いた。また同日、福間小学校の四年以上百二十人は、国民安全の日にちなみ、鼓笛隊を先頭に福間駅から同海水浴場の一文字防波堤まで行進し、防波堤から花束を海中に投げて水難事故などの防止を祈った。

◇南郷農協資材倉庫の落成式…3日午前10時、農協事務所新築倉庫内。

◇水泳安全指導者講習会…4日午後1時半、福間海水浴場『福海荘』主催は福間町教委、社会体育委、水泳の心得、救助法など講義と実技を指導。

◇オキウト草解禁…5日午前7時大だいこをあいずに鐘崎神社で漁船百そうがいっせいに出漁した。

◇水泳安全法講習会…7日午前9時半、津屋崎町青年研修所、事故防止、救助法など自衛隊から講師を招き学科、実技を指導。

◇玄海町が観光絵はがき…この ほどでき上がり、旅館、みやげ品店で売り出すことになった。一組み八枚で神湊海岸、宗像神社孔大寺神社、玄海ゴルフ場などがおさめられている。

◇都前期病害虫防除協議会…8日午前9時、町村長会事務局。

◇宗像町花園芸組合講習会…19日午前10時、同町役場。講師は県園芸試験場松川技師。テーマは『球根の切り花栽培』。

◇池野小で救急法講習会…18日午前10時、同校講堂。校区PTA役員を対象に実施。講師は氏神の宮大工棟梁神田（現に厳島神社あり）の生れ変りじゃなあ」

◇赤間祇園祭に花火大会…14日祇園祭り事として同日午後10時から釣川河畔で仕掛け打ち上げなど。赤間区、同商工会主催。同日は午後11時半、西鉄営業所発の臨時バス二本運行。◇大島海水浴場開き…12日午前10時同海水浴場。

◇婦人会代表者らが出席。

◇海水浴場など特別警戒…宗像署は13日から8月20日まで郡内各海水浴場、キャンプ場の特別警戒を実施する。同署は地元青年団などによる、パトロールや防犯灯の増設などを望んでいる。

◇神湊海水浴場で水神祭…9日11時から同海水浴場で行い た。農協、普及所など関係者が対策を打ち合わせる。

◇商業青年学級…29日午後6時宗像信用組合ホール。宗像町内の商店員を対象に商業簿記、一般教養（語学）などを学ぶ。同町教委主催。

◇津屋崎町浜の町婦人学級…10日午後1時、大神しげの会長宅『子供の心理と指導』を勉強。

◇福間町青年教育懇談会…12日午後2時、同町公民館。警察、保護司会、学校、PTA、青年団。

◇護国神社完成式…30日午前10時、玄海町田島小横の旧稽古跡で同神社は都遺族会が管理するが、宗像神社の末社として建てられた。

新築完成
—玄海の味・生魚料理—
みなと荘
宗像郡玄海町神湊
電話 神湊 五六番

宗像伝説　其の三十

地ノ島の「こや女」

宗像郡地島に「こや」という女があった。親は九郎右衛門といった。家が貧しいので、こやが九才の時に米一俵を借り、その代りに奉公に出された。奉公先では、こやが成長したら相応の縁組みをさせるということで、特に年期を決めないで使っていた。

十七年経った。こやも年増盛りの二十五才になった。ところが何時迄も暇が出ない。そこでこやが考えた。

「いつまでこうして婢（はしため）をしているのだろう。これでは孫の親孝行も出来ない。無意味に年月を送ることは堪えられない。」

こう考えて主人に暇を乞うた。

ところが主人が分らず屋。

「長年の間召し使ってやってそのお蔭で成長したのに暇をこうとは不届きな。身の代として米十五俵持って来い」

今も昔も因業な人というものはあったものです。

こやも仕方がありません。鐘崎に渡って知り合を頼って米十五俵借りて主人に出しました。残りは追ってイージーペイメントすることにしたのです。これを聞いた地元の人たちが気の毒がりました。主人に話をつけてくれた お蔭で残りの五俵は切り捨て貰うことができました。

それから更に他所で六年の奉公をすることにしたこやは和子分共十三俣の米の都合をつけて鐘崎の借米の返済も無事に済ませました。あとの扱いは彼女を気の毒がって十一俵でよいと事に計らってくれたので六年をつとめ上げた彼女はついに自由の身になりました。

実家に帰ったこやは八十余才の老父を出来るかぎり扶養しました。一人で心細がる老父の為に遠くへ嫁は行きません。従って思うような収入を得られません。それでも極貧にめげずに、四六時中老父の面倒を見ました。

その老父がふとした事から病いの床に臥しました。さあ今度は尚更大変です。枕元を離れることも出来ません。手をさすり、腰をさすって看病する日が三年間続きました。老父の食事は少量ずつ、日に十二度、湯水は日に三四十回もあたえなければなりません。しかしこやは一度も嫌な顔をしたことも なく、老父に嫌な思いをさせたことはありません。

かくして、こやが実家に帰って十年の月日が流れ、ついに老父もはかなくなりました。その数日前に九郎右衛門は

「日夜の老妻言語に云いつせない程有難い。老行は普通のことといっても貧困と辛いながら女の身でこれだけつくしてくれたのは、そうは滅多に無いことじゃ。お前は世間にも無い孝女じゃ。お前は氏神の守護神天祿（現に厳島神社あり）の生れ変りじゃなあ」

こう云って手を合わせて拝んだということです。一年三年の法事も立派にすませ、寺参りも欠かしません。石碑も立てました。このことが浦安行にも聞こえ、もう四十才過ぎたやの為に縁組みまで心配しましたが、こやは固辞しました。元禄二年、土地の庄長から藩庁に申し上げたので藩公から御褒美が出ました。

こやは享保八年九月、八十余歳でなくなり、法名を「妙心」といいます。里人にも感化を与え、今に「申し状」という記録になって残っています。大正十三年、時の村長大森達の識になる「孝女古出碑」が建てられています。

（H）

夏雲

夏雲に影をおとして
釣川のながれ涼やか

仰ぎ見る四塚の峯
声もなく夕日に映ゆ

さかのぼる四百年前
つぐられし歴史の跡

宗像の一郡あげて
戦国を矢だまの中に

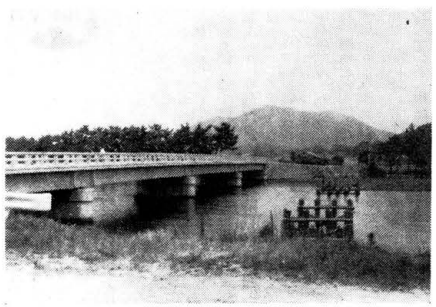
生き抜きし祖先の勲
山が述ぶ河が語らふ

そよ風の渡る音田に
心なく蜻蛉飛び交ふ

いまもなほ宗像人は
祖の来し貴き社を

ふるさとの光とはして
かたみに助く手ぶり美はし

☆ 大島浪子 ☆



（写真は江口橋より四塚連山を眺める）

宗像大社献詠
俳句作品集 (十一)

東郷　小野　淡波
土産物採の日課や水鉄砲

東郷　小野　花居
端居する音して開く月見草

沖ノ島　前田斎之助
かげろうに道行く人の影は消え

福間　城野　茎雨
沖より泳ぎ帰り夕焼濡らす

福間　城野　清子
泰山木のかがやき少年炭運ぶ

福岡　八木　菊代
小鳥啼き洗心の座や夏の雲

大島　板矢久仁子
薫風や校庭の声はこぶ窓

津屋崎　西住喜三郎
炎天を農夫噴霧機背い帰る

〃　久羽　文王
蝦蛄青く退く夜振灯の中に

〃　毛利　夜潮
梅雨の蝶人おじもなく羽たゝむ

〃　占部　河童
島に来しは一つの望み月見草

〃　渋田史外男
瓦焼く火が籠る四囲黒穂

〃　井浦　良介
揺れる車内うなじに初夏の風集り

〃　安部真佐子
若葉風泌みる金鉱掘られし跡

〃　香立喜一郎
緑蔭に来て宣伝カーは口噤む

〃　岩見佳代子
雨の夜の褪せし紫陽花再会す

〃　阿部　静子
東の間の梅雨晴れ五色のコップ買う

〃　増田　武光
旧ランプ点し深まるキャンプの闇

〃　吉野　享志
スタンドの明暗作るハエの音

〃　勝田　光一
妻と座す花茣蓙ピースが喫いたくなる

企業に於ける人つくり

出光佐三

去る五月四日、早稲田大学、大隈講堂で行なわれた日本学生事務管理連盟主催の講演会の席上で出光興産社長出光佐三氏は、「企業における人つくり」と題する講演をされた。これが出光興産の社誌であるオイルダイジェスト七月号に掲載されたので転載する事にした。

近頃、経営学とか、トップマネージメントとか云う一連の言葉に依って表わされる組織体、もしくは事業体の運営、管理に関する方法が問題となっているが、出光社長は、自己の信念と体験とによって、事業体運営の核心は組織以前の問題として、人間の問題があるといみじくも喝破せられている。先頃池田首相によって提唱された人づくりは、其の人間像、及び方法論が曖昧の為、各方面から批判の対象となったが、出光社長のこの講演内容には、これが明瞭に提示されている。さきに本誌に掲載した「人間尊重」と軌を一にするものであるが、ひとり企業に対してのみならず、全ゆる人々に示唆する所多しと云える。御愛読を乞う次第である。

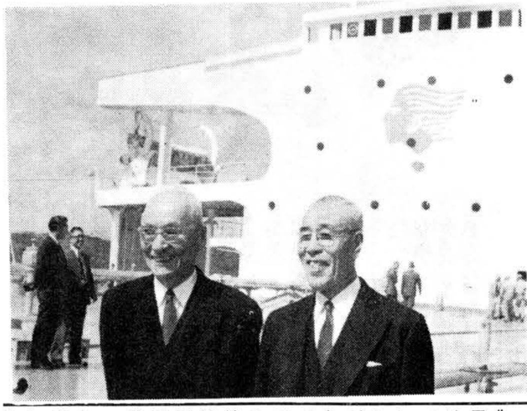
はじめに

出光でございます。みなさんが経営管理について非常に勉強になっており、ことに今日は「企業における人つくり」という題で話をせよということでございますが、このことは私自身が非常に興味を持っている問題でありますし、次の世代をになう若い方々に私の考えをぜひ聞いていただきたいと思っていたことなんです。それで、みなさんは私の今日の話を、話を聞くというより、こういう考え方が日本人にはあるということで、研究の材料、資料として採っていただきたいと思うわけです。私は学者ではありませんので理論めいたことはお話できませんが、ただ自分の体験と、それから得た結論を申しあげてみたいと思います。

私はこれでただいま七十九才なんです。そこで人生からいえば七十九年間、それからいまの仕事をはじめてから五十三年目になるわけでありますから、この間の体験を申しあげて結論に達したいと思います。

一、世界には「物の世界」と「人の世界」の二つがある

はじめに、どういうことを申しあげるか、荒筋をちょっと申しあげてみたいと思うんです。七十九年の人生と五十三年の事業経営の経験からみまして、最近結論に達したことがあります。それは世界に「物の世界」と「人の世界」と二つあるということをはっきり考えるようになったんです。公開の席で発表するのは今日がはじめてでありますが、「人の世界」というのは日本である。日本以外は「物の世界」である。それで「物の世界」において、物の分配ということを中心として発達してきたものが資本主義であり、社会主義であり、共産主義である。したがってこれらは日本のような「人の世界」には発達すべきものではない。明治時代に外国の「物の世界」の思想が入って来たために、今日ではこの三つの主義が氾濫しているが、明治以前のような「人の世界」の日本においては、こういうものは発達しなかったし、また発達すべきものではない。（つづく）



鈴木大拙翁に聴く (三)

――庭には始終出とるよ。街中には滅多に出ないが……この頃〃ダンプカー〃というのがあるが、あれは何のことかな……（説明をきき、笑われる）……そうか、私はまたダンピングカー、つまり安売りする車かと思っとったが……自動車なんていうものは、もともと西洋で自分の必要から作り出したもんだが、日本はそういう西洋でうまれ、発達したものをもってきて俄かに近代生活にはいったものだから、どうしてもいろいろな無理が生ずる。日本には矢張り人力車ぐらいが丁度よいのじゃなかろうか（と笑われる）ボランチアの精神も、イギリスあたりは永い伝統をもっておるし、国民性と結びついて、自然に培われてきたといえるが、日本の場合は新しいものであるだけに、しっかりと根付くまでにはいろいろな苦労や、困難があるんじゃないだろうか。それを乗り超えてはじめて、日本独自の行き方というものが生まれると思う。日本の更生保護事業も明治の頃から民間の人の手で下から盛り上がったものなのですが……、はじめは仏教関係の方々が起ち上がったわけです。今でも保護司のなかには宗教家が少なくありません。――ほう、そうか。保護司には宗教家が多いか、なるほどそれはよいことだなあ。宗教家にはそういう活動分野があったわけだ。宗教家はそうでなければならぬ。今日、坊さんは堕落しているなどという声も耳にするが、そういう目覚めた坊さんたちがおって、新しい社会的な意義のある仕事に奉仕されているということは実にいいことだ。（としきりに感嘆された。）

この頃の老人は「今の世は住みにくい、昔はよかったものだ」などということをよくいうが――そのように一概には言えぬと思う。私が幼い頃、老人たちは「明治になってからどうも住みにくい、徳川の時代の方がよかった」といっていたものだ。老人とはいつの世でもそういうことをいうものかも知れぬ。文明が進むということは、よいこともあろうし、わるいこともあろう。得失相半ばといわねばならぬだろう。今年は北陸に大雪が降り、食糧や、物資が不足して、交通が途絶え、あちらの人は大変難儀をしたようだが、昔もよく雪が降ったものだ。しかし、昔は大雪が降ってもそう困るようなことはなかったなあ。昔は冬になる前には、食糧やら衣類やら、薪炭などをちゃんと買い整えて冬ごもりに備えたものだ。それが雪国のしきたりだった。だから雪の中にとじこめられても今日のように困ったり、混乱したりするようなことはなかった。私の育った土地は金沢だが、子供の頃雪が降った朝は、先ず屋根にのぼって雪おろしをするのがきまりのようになっていた。私も一生懸命にやったものだ。

（次号に続く）

（更生保護四月号より）

日本の民主々義
戦前の場合（その七）

天野健一

西郷なき跡薩藩で重きをなした者は黒田清隆であるが黒田は随分変った人物で、数々の逸話やスキャンダルが多い。率直という点になれば彼を一番に挙げねばならぬが、餘りにも直情径行型で為に動もすれば狂愚の人となる傾きがあった。先に本紙に書いた三大電報で黒田が西郷従道の打電で征韓論をアッサリ取り止めた如きその直情の一例である。

彼は或る日靈岸島の大黒屋と云う鰻屋に行った。ボウッとした大入道が這入って来たので、家人が従者に聞いて初めて黒田なる事が判って鰻や酒も注意して特別扱をした。然るに黒田は鰻の焼けて来るのを待つ間にモウ十二分に酔を発して居た処へ蒲焼が来るとどう云う訳か俄に暴れ出し襖や障子を蹴破る。膳や徳利を投げるの大騒動を初めた。何の事だか判らぬが陸軍で評判の黒田であると云うので、大黒屋でももてあまし怒を宥めて主人が恐る恐る詫に出て「どう云う訳でお前様は御立腹なされましたかその仔細をお話し下さいませ」と云われて黒田は「俺どんを田舎武士と思ってお前は馬鹿にしちょるから俺どんは癇癪に障って投打ちしたのだ」斯う云うて威張って居るから主人が更に押し返して「どう云う事で御立腹になりましたかその訳を聴き度う御座います」「ウン分らんなら話してやる。俺どんを田舎者と侮って鰻の尻尾ばかり出したから癇癪起したのだ」大黒屋は思わず笑を禁じ得なかったが、「それは御前様が御無理で御座います。鰻の本当の味は尻の方にありますので黒田の御ぜんと判り殊更に尻を焼いて差上げたので御座います」黒田はそれを聞いて「ウンそうであったか鰻は尻がうまいのか俺どんが悪かった」と百円札を投げ出して帰ったがそれから後は大黒屋が贔屓になって鰻と云えば大黒屋からとり寄せたと云う事である。斯う云う馬鹿らしい事でも黒田の性格の一端が著れて面白い。酒を飲むと暴れ出し始末が悪い、殊に腕力は強いし酒乱の風も手伝って暴れ出されると席に居る者は皆コソコソと逃げ出すので、黒田は一人天下、益々乱暴は烈しくなる許りだった。和歌山藩の三異才と云われる岡本柳之助は若くして近衛砲兵中佐になったが、西南の役がすんだ翌年竹橋暴動が起った。これは近衛兵舎から宮城に向って発砲した有名な事件で之を煽動したのが岡本であった。為彼は一時入獄させられたが発狂したと云う事で罪を赦された。

×　　×

――宗像藪庵先生百話――

シンガポールの日本人医師

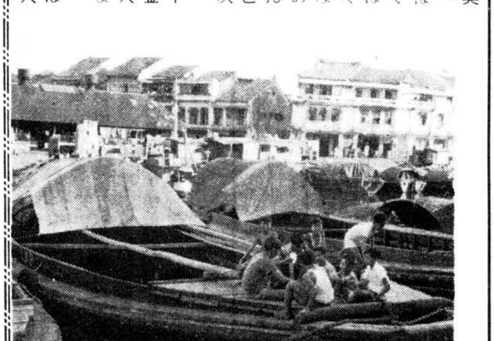
宗像太郎坊

私達がシンガポール敵前上陸で血を流した事も二十一年前の語り草となって了った。シンガポール陥落の昭和十七年二月十五日に生れ、昭南と名ずけられた赤ちゃんも、もう今年満二十一才の青年となっている。現在シンガポールには、コロンボ計画で数名の医師が派遣されている。その一人、耳鼻科の菊池医師より掲載の写真は送られたものである。私は昔、シンガポールにいた日本人医師の事を少し書いて後世に残しておきたいと思う。

ドクトル・ニシヤマ。この人は昭和の桃太郎とも云うべき人であるが、彼は征伐にではなく、往診治療に行ったのである。ニシヤマは仮名であるが、話は大東亜戦、一寸前の実話である。この先生は風ぐらいで騒ぐ藪ではなく、全く風も通じない大藪であった。そんな先生がどんな風の吹き廻しか、シンガポール一の大金持の中国人某に見込まれていた。この金持は昔の中国人の金持の表徴として、美妾数十人を従えていた。美妾達は前もって作られた時間表により、御主人の部屋に出頭していたという。そして其の産物が締めて、百人に及んだので、金持はいっその事と私立の小学校を作って、これに全員通学させた。皆んな親戚で、お父さんが、校長兼経営者である。そうなると、妾達が我が子こそ優秀である。子が優秀であるということは、わらわが優秀であるからであると云いたいばかりに、子の先生達に贈る賄賂も凄かった。然しその金の源はみんなかみ御一人、親父のふところから出た金である。

この金持の有力な親戚が南支のマカオ（葡領）にいて、何か得体の知れない熱病にとりつかれ、日々衰弱の一路を辿っている。中国の名医は勿論、西洋の名医にも診て貰ったが、何一つ験がなく、死を待つばかりと知らせてきた。中国人は親戚同志の団結が非常に強く、互いに守り合っているが、この便りを見て、じーっと考え込んでいた金持が、ハタと膝を打って「ウン、あの先生だ、あの名医に行って貰おう」と、ドクトル、ニシヤマに白羽の矢を立てた。この事を早速、先生にお願いすると、西山先生は顔面蒼白となり、風邪でさえわからないのに、西洋の名医が治せない患者をどうして治せましょう。こんな病人を診に往く事は即ち殺す事を意味する。

（つづく）



福間　井原　元彦
長雨の被害の話聞こえしか首うなだれて紫陽花の咲く

香椎　桜井　秀
ほの白き窓の花を背におはす弥勒菩薩の思惟静かなり

〃　桜井　ツ子
日曜を区切りとしつゝ月日すぐ孫に遇ふたのしみ過へるよろこび

吉武　原田　リノ
畦塗りて溜る田水をかきならす畝に勢ふ耕耘機の音

勝浦浜　永島　文子
大らかに海の彼方に虹立ちぬ入舟出舟の朝の一瞬

田島　宇都宮　淳
水の面に苗のなびくをながめをる老夫の顔に夕茜さす

田島　小野　迪夫
蚊帳の中に蛍放ちてよろこびし子らはいつしかねむりたりしか

深田　中野　節子
宴会の帰りといふにいさゝかの変りなき夫老いしと思ふ

吉武　金丸　柳蔵
久々にうちふる鍬の錆びつきて土のはなれの極めてわるし

お知らせ

今月号より「宗像藪庵先生百話」と題しまして、宗像出身、或は宗像大神崇敬のお医者さん方の随筆を掲載致します。

ここに云う藪庵とは、本業がヤブであると云う事では絶対ない事をお断りしておきます。

トップバッターである宗像太郎なるペンネームの人物は、現在山口市で日本化薬診療所長をしておられる篠田俊樹氏であります。氏は太平洋戦争中軍医として従軍し、南方各地を歴訪した経歴の持主で、話題が豊富であります。氏の面白いお話しに御期待下さい。

我楽苦多告知板

八月、夏、バカンスとか称して一億国民、国をあげて大八州の中をウロウロする楽しい季節となった。何と言ってもバカンスの王者は水上スキー。ある人、いでや男と生れてきてこれをココロミンことあらでやわと筑紫の国は神湊の浜辺へと赴いた。モーターボートに威勢よく乗ってエンジンの紐を引いた。あらその時よ！五体は中天高く舞い上り、ボートは波間に走り去る。夏とは言えど水の中である。水面に顔を出し、冷静に失敗を反省する。かくする事数回、漸く待望の水上スキーに打ちまたがった。ブウン、ガタガタ、ドボン、解説「最初はエンジンの音、次はスキーが波の上を走る音、終りはカッコよく滑っていた奴が海に落ちた音」この人翌日、出社して日頃水上スキーくとノボセ上っている男に曰く「オマエ洗濯板の上を裸で滑べるようなものだぞ！」ノボセ男、それより後は熱さめはててウツケの如くなりはてしとぞ……

教訓「見ると聞くとは大違い」